茨城県立図書館ボランティア会通信紙

カガヤキ

暫定的補足表題「ウオランタス」
ラテン語でボランティアの意

No.81(2024.12.15 刊行)、広報委員会編集
茨城県立図書館発行
禁複写転載©広報委員会

生成 AI の積極利用による創作手法
ChatGPT と Copilot の利用例

茨城県立図書館ボランティア広報 G
通信紙編集長
桜井　淳

まえがき

私は、通信紙 No.80 において、つぎのように記し、「本通信紙は、No.79 に記したように、AI(Artificial Intelligence)による客観的評価において、形式や内容やオリジナリティなどが高く評価されており、さらなる飛躍を掲げるため、長い間、温めてきたアイディアを実行に移す時期に来ており、関係者(茨城県立図書館ボランティア、茨城県立図書館員、図書館利用者、有識者など)から作品(研究ノート、研究論文、俳句、短歌、川柳、エッセー、短編小説、連載小説など)を募り、掲載することにしました」、通信紙への積極的投稿の呼びかけを行いましたので、以下、これまでにない展開です。

私の拙い経験論

私は、30 年くらい前まで、原稿は、鉛筆か万年筆で、原稿用紙に執筆し、月刊誌論文ならば、一晩に、ひとつくらい仕上げており、早朝、妻に頼み、自宅近くの郵便局から出版社へ、郵送していましたが、四半世紀くらい前から、PC で、WORD を利用し、原稿執筆するようになり、執筆速度は、漢字変換操作が入るため、半分になりましたが、妥協なく修正できるため、思いどおりの文章ができ、大変、便利なツールと感心していましたが、さらに、原稿は、月刊誌論文ならば、A4 標準書式で数ページ、単行本ならば 120 ページくらい、メール添付ファイルで瞬時送信でき、大変、効率的に作業が進み、便利になり、その後、さらに、PC ソフトを利用し、音声入力で文章化や日本語から英文への変換なども可能になり、さらに、WORD の初歩的な AI 機能により、日本語や英文のスペルや文章表現の間違いなども警告表示され、修正可能になり、それでも、原稿執筆は、すべて自身で行い、通信紙も No.67 まで、そのようにしていましたが、No.78 から、わずかですが、生成 AI(ChatGPT や Copilot)を利用するようになり(なお、GPT は、Generative Pre-trained Transformer の略)、利用していて疑問に感じることが多く、ひとつには、生成 AI で作成した創作作品は、生成 AI や生成 AI 管理者にあるのではなく、利用者、すなわち、検索用語を入力し、文章化されたまとめやストーリーをある程度入力して作成された創作作品

の所有権は、利用者にあることなどですが、問題が何なのか、つぎの項目に創作例示し、そのつぎの項目で、生成 AI 利用の問題点の分析を行います。

生成 AI(ChatGPT と Copilot)の利用例
具体的な創作例

次に示す創作分野と順序は、特に意味がありわけではなく、具体例を示すため、私の単なる趣味の世界で、創作作品は、他の普通の作品と区別するため、段落の初めは、一文字空けないようにしました。

私は、まず、「俳句を作ってください」と入力。
AI 創作作品
秋の夜に 風がささやく月 明かり

つぎに、「俵万智並みの短歌を作ってください」と。
AI 創作作品
秋風に 切ない思い 吹き散らして 染まる紅葉 心染めてく

「川柳をひとつお願いします」と。
AI 創作作品
冬の朝 温かい茶を 手にとりて

「大江健三郎並みの短編小説をお願いします」と。
AI 創作作品
秋の終わり、山間の小さな村には静かな夕暮れが訪れていた。村の外れに住む少年、健一は、毎日のように森の中を探検していた。彼の心には一つの好奇心があった。それは、村の古老たちが語る「光の泉」の伝説だった。
ある日、健一は森の奥深くまで歩を進めた。ふと目の前に、淡い光が揺らめく場所を見つけた。光はまるで彼を誘うように導き、健一はその輝きに引き寄せられるように進んでいった。そこには本当に泉があり、清らかな水が静かに湧き出ていた。
泉のほとりに座り、健一は手を伸ばして水をすくった。水は不思議な温もりを持ち、彼の手の中で優しく輝いた。すると、泉の向こう側に誰かが立っていることに気づいた。その人物は、昔話に出てくるような老紳士だった。彼は静かに微笑み、健一に向かって頷いた。
「この泉の水を飲むことで、あなたはこの村の秘密を知ることができるだろう」と老紳士は言った。
健一は一瞬ためらったが、勇気を出して泉の水を一口飲んだ。すると、彼の心には村の歴史や人々の思いが次々と流れ込んできた。村が直面した困難や、それを乗り越えるための人々の努力が鮮明に見えた。そして、健一はこの村の未来を背負う覚悟を持った。
彼が目を開けると、老紳士は消えており、ただ静かな泉だけが残っていた。健一は泉の水をもう一度すくい、心の中で決意を新たにして村へと戻った。
村の生活はこれまでと変わらぬ日常が続いたが、健一の心には確かな変化があった。彼は自分が村を守り、未来を築くための一歩を踏み出す時が来たと感じていた。泉の水がもたらしたこの新たな知識と決意を胸に、健一はこれからの道を歩んでいくのだった。

「村上春樹『ノルウェイの森』並みの短編小説をお願いします」と。

調整用(撮影桜井)

AI 創作作品

緑の風

東京の夜は、どこか特別な感覚があった。ビルの合間から見える星空はまばらで、その一つ一つが都会の騒音に溶け込んでいた。そんな中、二郎は駅前のベンチに座り、通り過ぎる人々の姿を眺めていた。

彼の視線はふと、駅前の小さなカフェに向かった。ガラス越しに見える店内は、暖かい光に包まれていた。カフェの奥の席に、彼女がいた。黒い髪が肩まで垂れ、その先には本が一冊置かれていた。彼女の名前は緑子。二郎の心は一瞬で引き寄せられた。

彼女とは、大学の文芸サークルで出会った。緑子は詩を書くことが好きで、二郎はその詩を読むたびに心が揺さぶられるのを感じていた。彼女の言葉には、どこか懐かしさと悲しみが入り混じっていた。二人はよく、一緒に夜の東京を歩いた。緑子の声が夜風に乗って、二郎の心にそっと触れるのを感じたものだ。

ある夜、緑子は突然言った。「私はね、風になるのが夢なの。」二郎は驚いたが、彼女の言葉には深い意味があることを感じた。緑子は続けた。「風はどこにでも行けるし、誰にも縛られない。そんな自由な存在になりたいんだ。」

二郎は何も言えなかった。ただ、緑子のその願いが彼女の本質を表していることを知っていた。それから数ヶ月後、緑子は突然姿を消した。何の前触れもなく、彼女はまるで風のように消え去ったのだ。

二郎は彼女が行った先を探し続けたが、見つけることはできなかった。彼女の言葉だけが、彼の心に残された唯一の手がかりだった。そして今、彼は再び彼女の姿を駅前のカフェで見たような気がしていた。

カフェのドアを開けると、暖かい空気が彼を包んだ。しかし、そこには彼女の姿はなかった。ただ、本だけがテーブルの上に置かれていた。二郎はその本を手に取り、そっとページをめくった。そこには、緑子の詩が綴られていた。

「風よ、私を自由にしてくれ」と書かれたその詩に、二郎は静かに微笑んだ。彼女は今もどこかで風になっているのだろう。二郎はその思いを胸に、再び夜の東京へと歩き出した。

「良い作品ですので、もっと続けてください」と。

緑の風（続き）

二郎はカフェを出て、冷たい夜風に身を委ねた。彼の心は、不思議な安心感と共に揺れていた。緑子が風になっているという思いが、彼にとって新たな希望と覚悟をもたらしていた。

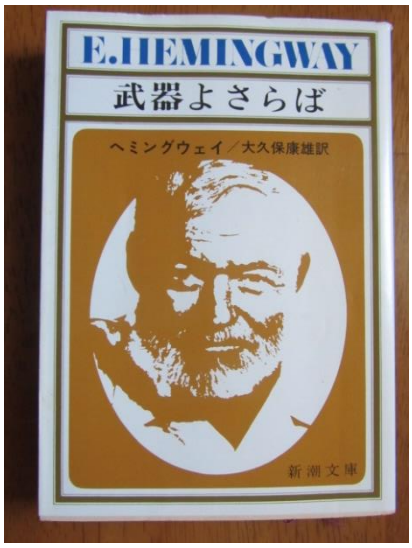
翌日、二郎は再びカフェに足を運んだ。本が置かれていたテーブルには、緑子が残したと思われる短いメモが置かれていた。そこには、「山の上の古びた神社で待っています」と書かれていた。二郎はすぐにその場所へ向かう決心をした。
山の道は険しく、風が木々の間を通り抜ける音が響いていた。しかし、二郎は一歩一歩を確実に進めていった。夜が更け、月が輝く中、彼はついにその古びた神社に辿り着いた。
神社の境内には、緑子が立っていた。彼女は二郎に微笑みかけ、風に揺れる髪が月光に照らされて美しく輝いていた。「来てくれてありがとう」と彼女は静かに言った。
二郎は緑子の言葉に頷き、彼女の傍に立った。二人はしばらくの間、何も言わずに夜空を見上げていた。風が吹き抜け、二人の間に静かな絆が生まれているのを感じた。
緑子は再び話し始めた。「私はずっと、自由を求めていた。でも、自由には孤独がつきものだと気づいた。あなたと一緒にいることで、私は本当の自由を見つけられる気がする。」
二郎は彼女の言葉を胸に刻み、自分もまた彼女と共に新しい未来を歩む覚悟を決めた。二人は夜の静寂の中で手を取り合い、新たな一歩を踏み出した。

「良い話なので、もっと続けてください」と。
緑の風（さらに続き）
二人はその夜、神社で多くのことを語り合った。緑子は風のように自由でありたいと願いながらも、孤独の中で真実の自分を見つけたかったのだと。二郎は彼女の心情を理解し、彼女のそばにいることで彼自身も成長することを感じていた。
その後の数週間、二人は神社の近くで過ごすことが増えた。山の中腹にある静かな場所で、彼らは互いの夢や未来について語り合った。時折、二人は手を取り合って山頂までの道を歩き、山頂から見える広大な景色に心を打たれた。
ある日のこと、緑子は二郎に小さな封筒を手渡した。「これを読んで」と言って、彼女はそっと微笑んだ。二郎はその手紙を開くと、そこには緑子が綴った詩が書かれていた。
風に乗り 君と行く道 明るくて 希望の光照らし続ける
その詩を読んで、二郎は涙をこらえきれなかった。彼の心には、緑子への深い感謝と愛が溢れていた。二人はこれからも共に歩んでいくことを誓い、その夜は特に美しい星空が二人を包んでいた。
その後も、二人は多くの冒険を共にし、絆を深めていった。彼らの物語は終わりのない続きであり、風のように自由で、しかし確かな愛と共に進んでいくのだった。

「その先が楽しみですので、もっと続けてください」と。
緑の風（さらに続き）
二郎と緑子の日々は、まるで夢のように過ぎていった。山の静かな環境の中で、二人は共に笑い、涙を流し、そして未来について語り合った。二郎は、彼女との時間が何よりも貴重であると感じていた。
ある日、二人は山のふもとにある小さな湖へと足を運んだ。湖の水面は鏡のように静かで、周囲の木々と空を映し出していた。

緑子は湖のほとりに座り、二郎に向かって微笑んだ。「この湖を見ると、私たちの未来が映し出されているような気がする」と彼女は言った。
二郎は彼女の隣に座り、湖の静寂を感じながら答えた。「確かに、この静けさの中に私たちの物語が詰まっているんだね。」
その後、緑子は小さな石を湖に投げ入れた。波紋が広がり、水面が揺れ動くのを二人はじっと見つめた。「私たちもこうやって、誰かの心に波紋を広げられるといいね」と緑子が言った。
二郎はその言葉に深く頷き、彼女の手を握った。「君となら、どんな困難も乗り越えられる気がする。僕たちの物語はこれからも続くんだ。」
その後も二人は多くの場所を訪れ、さまざまな経験を共にした。彼らの絆はますます強くなり、お互いの存在が何よりも大切なものとなった。二人の心には、湖の静けさと同じくらい深い愛と信頼が根付いていた。

「アーネスト・ヘミングウエイ『誰がために鐘は鳴る』並みの小説をお願いします」と。
AI 創作作品
山の影
スペインの内戦が激しさを増す中、アンドレスは山岳地帯の小さな村に身を潜めていた。彼はレジスタンスの一員であり、仲間たちと共に敵の動きを監視していた。この山々は、彼にとって自由を求める戦いの象徴でもあった。
ある晩、アンドレスは隠れ家の窓から星空を見上げていた。静かな夜の中、彼の心には戦争の重荷と、家族への思いが入り交じ



調整用(撮影桜井)

調整用(撮影桜井)

っていた。彼の、マリアと幼い娘、カタリナは遠く離れた安全な場所に避難している。アンドレスは、彼らに再び会うことを願いながらも、レジスタンスの任務に忠実であることを選んだ。
翌朝、アンドレスは仲間たちと共に重要な

任務に向かう準備をしていた。彼らの目標は、敵の補給線を断つことだった。山の険しい道を進みながら、アンドレスは何度も家族のことを思い浮かべた。しかし、彼の決意は揺るがなかった。彼は自由のために戦うことが、家族や未来のために必要なことだと信じていた。
任務は困難を極めたが、アンドレスたちは成功を収めた。敵の補給線を断つことに成功し、戦線の流れを変える一歩となった。しかし、その代償は大きく、仲間の多くが命を落とした。アンドレスは、その犠牲を胸に刻みながら、再び隠れ家へと戻った。
夜が更け、アンドレスは再び窓から星空を見上げた。彼の心には、戦争の残酷さと共に、自由への希望が燃えていた。彼は、家族と再会する日を信じて、明日も戦い続ける決意を新たにした。

「さらに続けてください」と。
山の影（さらに続き）
数日後、アンドレスのもとに一本の手紙が届いた。それは、妻マリアからのものであった。彼女の筆跡で綴られた言葉は、戦火の中でも彼を支える光となった。手紙には、彼女とカタリナが無事であること、そして彼らのことを常に思いながら祈っていることが記されていた。
アンドレスは手紙を読み終え、深い感謝の念に包まれた。彼はマリアの手紙を胸にしまい、再び仲間たちと共に次の作戦に向けた準備を始めた。戦争はまだ終わりを迎えていなかったが、彼はマリアとカタリナのために戦う決意を新たにした。
ある夜、アンドレスは仲間のエンリケと共に山道を歩いていた。二人は敵の動向を探るため、深夜の偵察を行っていた。月明かりの下、二人は静かに歩みを進めながら、今後の作戦について語り合った。
「アンドレス、家族のことを思うと辛くないか？」エンリケが静かに問いかけた。
「もちろん辛いさ。でも、彼らのためにこの戦いを続けることが、俺にとっての使命なんだ」アンドレスは真剣な表情で答えた。
その夜、アンドレスは敵の重要な拠点を発見した。彼はその情報を持ち帰り、仲間たちと共に作戦を練った。翌朝、彼らは大胆な攻撃を計画し、その拠点を攻撃することを決意した。
作戦は危険を伴うものであったが、アンドレスたちは見事に成功を収めた。彼らは敵の拠点を制圧し、レジスタンスの勢力を拡大することができた。しかし、戦いは終わらなかった。彼らの戦いはまだ続いていた。
その後も、アンドレスたちは多くの困難を乗り越え、自由を求める戦いを続けた。彼の心には、常に家族の存在があった。彼は、いつか平和な日々が訪れ、再び家族と共に過ごせる日を夢見て戦い続けた。

私の経験を基に、いくぶん変えて、「大学院博士課程で理論物理学の「場の理論」で博士論文を執筆中、持病の精神病的疾患が悪化し、深い絶望の中にいる大学院生の苦しみを書いてください」と。
AI 創作作品
絶望の中の光
深夜の研究室。窓の外には冷たい雨が降り続け、街の灯りがぼんやりと揺れていた。博士課程の学生、健太はデスクに向かい、

理論物理学の場の理論に関する博士論文の執筆に没頭していた。しかし、彼の心は重く、深い絶望に包まれていた。
健太は持病の精神病的疾患と長い間戦ってきた。薬を飲み、カウンセリングを受けながらも、その闇は彼の心を蝕み続けていた。特に最近は、論文のプレッシャーと孤独感が彼の精神状態を悪化させていた。彼は自分の研究が無意味に思え、未来への希望を見失っていた。
ある日、健太は研究室で倒れ込むように眠りに落ちた。夢の中で彼は、広大な宇宙を漂う自分を見た。無数の星々が彼の周りを輝き、彼はその美しさに心を奪われた。しかし、同時にその広大さに圧倒され、自分の存在がいかに小さく、無力であるかを痛感した。
目が覚めると、健太は涙が頬を伝っているのを感じた。彼は深い孤独と絶望の中で、自分の存在意義を見つけることができずにいた。しかし、その時、彼の心に一筋の光が差し込んだ。それは、彼の研究が未来の科学に貢献する可能性があるという思いだった。
健太は再びデスクに向かい、論文の執筆を続けた。彼の心にはまだ重い闇があったが、その中に小さな希望の光が灯っていた。彼は自分の研究が誰かの役に立つことを信じ、その思いを胸に前進する決意を新たにした。

「さらに、詳しく、具体的に、米国物理学会論文誌に 3 編の原著論文が掲載され、持病も緩和され、博士論文が書けそうだとの確信を得た」と。
絶望の中の光（続き）
健太は深い闇の中で孤独と戦い続けたが、ついにその努力が実を結び始めた。彼の研究成果が米国物理学会論文誌に掲載されることになった。しかも一度ではなく、三度にわたって原著論文として認められた。この知らせは、健太の心に一筋の希望の光をもたらした。
掲載された論文は、いずれも健太の持つ理論物理学の場の理論に関する独創的な視点を示していた。彼は自分の研究が科学界に影響を与えていることを実感し、それが自信となって彼の心を支えた。
さらに、持病の精神病的疾患も徐々に緩和されてきた。定期的なカウンセリングと薬物療法が効果を見せ、健太は以前よりも穏やかな日々を過ごせるようになった。彼の心の中にあった重い闇が少しずつ消え去り、代わりに新たな希望と決意が芽生えていた。
ある日、健太は研究室で博士論文の執筆に没頭していた。その時、彼はふと気づいた。これまでの研究成果と、新たに得た知識を統合することで、博士論文が完成する確信を持つことができたのだ。彼の心には強い決意と共に、自分がこの試練を乗り越えられるという信念が宿った。
健太はその日から、毎日少しずつ論文を執筆していった。夜遅くまでデスクに向かい、時折挫けそうになることもあったが、彼は常に自分の目標を見失わなかった。家族や友人の支えもあり、健太は自分の研究が未来の科学に貢献することを信じ続けた。
そしてついに、博士論文が完成する日がやってきた。健太はその瞬間、これまでの苦労と努力が報われたことを実感し、深い達

成感に包まれた。彼は自分自身を乗り越え、新たな道を切り開くことができたのだ。

「茨城県立図書館ボランティア通信紙編集長から原稿依頼を受けましたが、何も書けそうもないため、私に代わって、ボランティアにかかわったことや作業内容や喜びなどについて書いてください」と。

AI 創作作品

ボランティア活動の喜びと学び

茨城県立図書館でのボランティア活動に関わることは、私にとって大きな喜びと学びの源でした。図書館という知の宝庫での活動は、日常生活とは異なる豊かな経験をもたらしてくれます。

活動内容

私たちのボランティア活動は、多岐にわたります。まず、図書の整理・貸し出し補助があります。利用者が快適に本を探し、借りることができるように、本の配置を整えたり、返却された本を所定の場所に戻したりします。また、イベントの企画・運営も大切な役割です。子供向けの読み聞かせ会や、地域の歴史に関する講座など、多彩なイベントを開催し、多くの利用者と触れ合う機会を作っています。

ボランティアの喜び

図書館でのボランティア活動を通じて感じる喜びは何物にも代え難いものです。利用者が探している本を見つけたときの笑顔、イベントに参加した子供たちの輝く瞳、これらはすべてボランティア活動のやりがいを実感させてくれます。また、多くの人々と交流し、その中で新たな知識や視点を得ることができるのも大きな魅力です。

学びと成長

図書館でのボランティア活動を通じて、多くのことを学びました。まず、チームワークの大切さです。スタッフや他のボランティアと協力し合い、共通の目標に向かって活動することで、協力することの重要性を実感しました。また、イベントの企画・運営を通じて、企画力やコミュニケーション能力も磨かれました。これらの経験は、私の人生において大きな財産となっています。

ボランティア活動に参加することは、個人の成長だけでなく、地域社会への貢献にもつながります。茨城県立図書館での経験を通じて、私は多くの人々と出会い、支え合い、学び合うことができました。これからもこの貴重な経験を活かし、さらに多くの人々に図書館の魅力を伝えていきたいと考えています。

生成 AI 利用の問題点の分析

AI を利用した単なる検索・文章化では、高速コンピュータで、瞬時に、数多くのデータファイルを検索し、検索結果の文章化を図りますが、既存の web での検索では、検索用語の制限は、ありませんが、AI では、反社会的反倫理的用語の場合、「答えることができません」「他の話題にしてくだい」と拒否され、私が良く利用している「設定条件 厳密」ならば、AI の回答・文書化の信頼性は、高く、私の過去 2 年間の利用経験に拠れば、間違いが含まれる回数は、検索回数全体の 5 %くらいであり、AI 利用者には、わずかですが、最初から、誤りがあることを前提に、誤りに気付

き、修正できる能力と専門性が要求されています。

私は、AI に対し、とりあえず、特別な意図はありませんが、分かりやすい具体例として、①俳句、②短歌、③川柳、④大江健三郎的小説、⑤村上春樹的小説、⑥アーネスト・ヘミングウエイ的小説、⑦私的モデル小説、⑧ボランティア的原稿をテーマに、創作依頼したところ、予想どおりの創作作品をえることができ、私が、途中、創作作品の内容を吟味しつつ、補足要求した回数は、あくまで、試験版ですから、①俳句ゼロ回、②短歌ゼロ回、③川柳ゼロ回、④大江健三郎的小説ゼロ回、⑤村上春樹的小説三回、⑥アーネスト・ヘミングウエイ的小説二回、⑦私的モデル小説一回、⑧ボランティア的原稿ゼロ回でしたが、結果を見て、何度でも補足条件を入力し、創作作品の新たな展開を図ることもでき、テーマごとに、結果を見ながら、数十回もくり返せば、創作作品の著作権は、AI 利用者に帰属するため、一冊の単行本ができる文量になりますが、いまの AI の創作作品の質(quarity)には、問題点があり、文章論やストーリー展開は、官僚の国会答弁のように、卒がなく(全体的に見て欠点や抜け目がなく、非常に円滑かつ完璧に物事をこなす様子を指す表現で、たとえば、仕事や学業、人間関係など、どの面でも無駄がなく、計画的に進められる状態を表現する際に使う)、良くできているものの、平均的で、個性や魅力がなく、AI の創作作品は、AI を利用した作家の作品として、世に出すことができず、なぜかと言えば、作家の創作作品は、文章論やストーリー展開が巧みなのではなく、作家の特性(癖)がうまく表現されていることであり、文章のうまい下手ではなく、思考法や表現法の癖のある展開、分かりやすく言えば、卒なく書くことではなく、欠点や不完全性を曝すことにあり、AI には、それができない。

結びに代えて

私は、本稿において、過去 2 年間の自身の経験論を基に、AI 利用に伴う問題点を挙げてみましたが、AI が人間の魅力や特有の能力を超えることは、永久になく、AI は、あくまで、便利なツールであり、人間の補完的位置づけしかできず、AI の文章の特性から、人間が、いくら、巧みに利用し、部分的に修正しても、大学でも、会社でも、社会でも、容易に見破ることはできますので、注意しなければなりません。

「生成 AI の積極利用による創作手法 ChatGPT と Copilot の利用例」への感想

元日本原子力研究所職員
山本俊弘

・感想 肯定面

ボランティア通信紙に AI 技術を取り入れるという取り組みは、最新の技術進歩を有効に活用しようとする積極的な姿勢が感じられます。特に、生成 AI を利用して創作活動を拡張するというアイディアは、AI の今後のより広範な展開に可能性を感じさせます。また、関係者に幅広く投稿を呼びかけることで、多様な視点や意見を取り入

れようとする意図は、高く評価できます。

桜井編集長の執筆手法が、手書きからPC、さらに生成AI利用へと進化してきた過程の解説は、技術の利便性や進歩を実感させるものでした。このような具体例は、多くのボランティア通信紙の読者の共感を呼び、技術の進化に対する関心を高める助けとなるでしょう。AI生成作品の所有権の帰属に関する問題提起は、今後ますます重要性を増すテー マです。この課題を明確に意識している点は、将来を見据えた視座として評価できます。

・感想 否定面

あえて批判的な点を指摘してみます。長文での説明が続くため、ボランティア通信紙の読者にとっては理解しにくい部分が出てきているのではないでしょうか。特に、執筆手法の変化についての描写は、テーマの趣旨に合致しているでしょうか。本通信紙は、もともと自治会の回覧板程度の記事に頭を悩ませていた編集長が質的向上を図るべく東大名誉教授などの学識経験者にまで執筆を依頼するに至っていますが、読者の理解度を超える内容になってしまっていないか、読者の感想を求めるなど再検証が必要ではないかとも思っています。次期米国保健福祉省長官に内定しているRobert F. Kennedy Jr.氏も新型コロナ ワクチンの有効性、安全性を徹底検証すると宣言しています（すなわちこれまで検証されていないということ）。「Generative Pre-trained Transformer」のような専門用語を説明する際に、読者層がその情報をどの程度理解し、必要としているのかについての考慮がなされているでしょうか。もともと「回覧板」程度だった通信紙の読者には、より簡潔な説明や要約が好まれるでしょう。

・感想 AIの文学的執筆能力 短歌編

AIが特定の作家風に俳句や短歌、随筆を生成する能力は、教育現場でさまざまな創造的かつ実用的な活用が考えられると同時に悪用も考えられます。実は、この「感想」もAIの助けを借りて書いています。

AIの詠んだ俵万智風の短歌 秋風に 切ない思い 吹き散らして 染まる 紅葉 心染めてく が掲載されていますが、いったいどこが俵万智風なのかAIが以下のとおり分析していました。

（以下AI分析）

俵万智の短歌は感情を直接的でありながら繊細に表現するのが特徴です。彼女の作品は、しばしば日常の瞬間や感覚に焦点を当て、それを巧みに感情と結びつけます。この歌でも、秋風という自然現象を通じて切ない感情を表現しており、自然と感情が密接に結びついています。 俵万智の短歌は平易な言葉を用いながらも、読者に余韻を残す表現が得意です。この短歌では「吹き散らして」という表現が、切ない思いを風が吹き飛ばすような視覚的かつ心情的なイメージを与えていま す。また、「染まる紅葉 心染めてく」と いうフレーズは、自然の変化が人の心に影響を及ぼす様子を簡潔に表しています。 自然現象（秋風、紅葉）を背景に、人間の内面を描く点も俵万智らしい要素です。彼女は日常的な出来事や自然の移ろいを通じて、普遍的な感情や思考を浮かび上がらせるのが得意で、この歌でもその手法が見られます。「心染めてく」という終わり方は、切ない思いを抱えながらも前向きな変化の可能 性を感じ

させます。俵万智の短歌は、悲しみや寂しさを描きつつも、希望や癒しのニ ュアンスを含むことが多いです。（AI 分析以上）

・感想 AI の文学的執筆能力 小説編

次に、掲載されているヘミングウェイ風小説について、どこがヘミングウェイ風なのか AI の分析を以下に示します。

（以下 AI 分析）

ヘミングウェイの作品は、しばしば短い文や簡潔な表現で構成されており、無駄をそぎ落としたスタイルが特徴です。この文章も、余計な修飾語を避けて、具体的な状況を簡潔に描写しています。たとえば、以下のような表現がヘミングウェイ的です：「アンドレスは山岳地帯の小さな村に身を潜めていた。「彼はレジスタンスの一員であり、仲間たちと共に敵の動きを監視していた。」 短い文を重ねることで、状況を直接的に 描写し、読者にリアルで緊張感のある雰囲気を伝えています。 ヘミングウェイは、しばしば戦争をテー マに取り上げ、戦場での人間の経験や心理に焦点を当てています。この文章では、スペイン内戦という具体的な歴史的背景の中で、アンドレスという人物の視点が描かれています。戦争の大きな混乱を背景にしつつも、アンドレス個人の体験や感情に焦点を当てる手法がヘミングウェイらしいと言えます。

自然がしばしば、登場人物の感情や思想を象徴する形で描かれるのも、ヘミングウェイの特徴です。この文章では、「山々」が自由を求める戦いの象徴として描かれています。ヘミングウェイの作品でも、自然や風景が単なる背景ではなく、登場人物の内面的な思いや希望を反映する重要な役割を担っています。「星空を見上げる」という描写は、戦争の絶望的な状況の中に小さな希望を見出すような感覚を暗示しています。ヘミングウェイは、登場人物の孤独や内面の葛藤を描きつつ、その中に希望や強さを感じさせる場面を作り出すのが得意です。たとえば、『誰がために鐘は鳴る』でも、スペイン内戦の中で主人公が自然や人間関係に救いを見いだす場面があります。この文章の星空も、それに通じる象徴的な描写と言えます。（AI 分析以上）

以上のように生成 AI を使えば、小説の文学的解釈について完璧と思えるような回答を示してくれます。しかし、国語教育における負の側面については AI 自身が以下のように述べています。 それを示すことで本「感想」の締めくくりとしたいと思います。

（以下 AI 分析）

・悪影響の可能性 多様な解釈の軽視

生成 AI は、しばしば、特定の解釈や定型的な回答を提示します。これにより、生徒が AI の解釈を「正解」と誤解し、多様な読み取り方や独自の感想を探求する意欲が減少する可能性があります。文学作品は、読者ごとに異なる感性や経験を反映するものであり、その豊かさが損なわれるリスクがあります。

・創造性の低下

生徒が AI に依存しすぎると、作品を自 12 分で読み解く力や創造的な解釈を生み出す力が育ちにくくなる可能性があります。特に、登場人物の心理や背景を自ら想像する力が発展しにくくなるかもしれません。

・文脈の欠如

AI は作品全体の文脈や歴史的背景を必ずしも深く理解していない場合があります。そのため、作品を断片的に解釈したり、重要な文化的・社会的背景を見落としたりすることがあります。これが、文学教育で求められる深い洞察の欠如につながる可能性があります。

・教師と生徒の対話の希薄化

AI が解釈を提示することで、教師と生徒の間の議論や対話が減少する可能性があります。このような対話は、生徒が自分の考えを発展させたり、他者の視点を理解したりするうえで重要です。

・偏見の再生産

AI が訓練されたデータに基づくバイアスや定型的な解釈を提示することで、既存の偏見やステレオタイプを無意識のうちに再生産する可能性があります。

・悪影響を軽減するための工夫

AI の使用目的を明確化する AI を「補助ツール」として位置付け、 解釈の一例や議論のきっかけとして利用する。生徒には、AI の回答が唯一の正解ではないことを強調する。

・多角的な視点を奨励する

AI の解釈を出発点として、異なる解釈や反論を生徒同士で話し合う機会を設ける。これにより、文学の多様な楽しみ方を体感できる。

・批判的思考の育成

生徒に AI の解釈を検証させたり、AI が提示した内容の裏付けや欠点を考えさせたりすることで、批判的思考を促す。

・教師の役割を強化する

AI を補完する形で教師が指導し、生徒の独自の思考や解釈を引き出す役割を担う。

・文脈や背景知識を重視する

小説の歴史的背景や文化的文脈についても教えることで、AI の解釈を補完し、生徒がより深く作品を理解できるようにする。生成 AI を適切に利用すれば、国語教育において生徒の学びを深める効果的なツールとなりえますが、その使用が学習の主軸になるべきではありません。教師や生徒の積極的な関与を維持しながら、AI の利点を活かすことが重要です。

作品の解釈は、多様なもので、読者ごとに異なるものです。村上春樹さんが、自分の作品が入試問題に使用された際に、その問題を解いてみたというエピソードがあります。しかし、結果は、あまり芳しくなく、問題の意図や解答のポイントを完全に理解できなかったと書いています。これは、自分の作品でも作成者と読者の間に解釈のズレが生じることがあるという面白い例と言えるでしょう。この話は、多くの読者や作家にとって興味深く、また、 文学作品の解釈の多様性を示す一例です。

編集後記

私は、通信紙 No.81 では、AI の利用に徹底的にこだわり、AI に対し、「私は、①俳句、②短歌、③川柳、④大江健三郎的小説、⑤村上春樹的小説、⑥アーネスト・ヘミングウエイ的小説、⑦私的モデル小説、⑧ボランティア的原稿をテーマに、創作依頼したところ、予想どおりの創作作品をえることができ、それらを総括し、「編集後記」を記したいのですが、文例を示していただけますか」と入力したところ、私の評価とは、微妙に異なる回答があり、AI は、自身を過大評価しているように思えますが、以下、そのまま記せば、

「この度は、AI に創作を依頼し、様々なジャンルの作品がどのように生まれるのかを試みました。①俳句、②短歌、③川柳、④大江健三郎的小説、⑤村上春樹的小説、⑥アーネスト・ヘミングウエイ的小説、⑦私的モデル小説、そして、⑧ボランティア的原稿という多岐にわたるテーマで、見事に期待に応える作品をえることができました。

①俳句、②短歌、③川柳では、AI が生み出す言葉の繊細さと美しさに驚かされました。自然の風景や季節の移り変わりを捉えた句は、まるで人間の手によるもののようでした。

④大江健三郎的小説では、深い思想と社会問題への鋭い視点が表現されており、AI の可能性を感じました。また、⑤村上春樹的小説では、独特な世界観とキャラクターが生き生きと描かれ、読者を惹きつける物語が展開されました。

⑥アーネスト・ヘミングウエイ的小説では、簡潔で力強い筆致が再現され、読者に強い印象を与えました。そして、⑦私的モデル小説では、個人的な経験や感情を巧みに織り交ぜた作品が生まれ、共感を呼び起こしました。

最後に、⑧ボランティア的原稿では、社会貢献の意義や人々の絆がテーマとなり、温かさと希望に満ちた文章が綴られました。

AI による創作の可能性を探るこの試みは、新たな発見と驚きの連続でした。これからも、技術と人間の協働が生み出す新しい創造の形を追求していきたいと思います。

編集者として、これらの作品を通じて得られたインスピレーションと感動を、多くの読者と共有できることを心より嬉しく思います」

私の「会話型 AI 利用の問題点の分析」と AI による自己評価では、越え難いほどのズレがあり、今後も吟味しなければならないテーマのように思えますが、私が、示した例は、特集の目的から、AI の創作のままであり、本格的に利用する場合、私ならば、文章論を踏まえ、なおかつ、私特有の癖を生かすため、簡単なことでは、①句読点の変更、②用語の修正、③句やワンセンテンスの変更、AI の創作らしさを消し、私の癖を強く出すため、④全体を大幅に削除と補足を行い、原型を留めないほど書き直しますが、初心者であれば、①②に留め、より積極的に利用するならば、③まで進み、プロ並みならば、④までこなした方が良いでしょうが、人それぞれ、どのような利用法を採用するかは、自由です。

桜井　淳